

ポスター | 2-03 外科治療遠隔成績

ポスター

治療戦略

座長:北川 哲也 (徳島大学大学院)

Fri. Jul 17, 2015 1:50 PM - 2:14 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

II-P-163~II-P-166

所属正式名称:北川哲也(徳島大学大学院医歯薬学研究部 心臓血管外科学分野)

[II-P-166]肺高血圧を呈する2次孔欠損型心房中隔欠損は乳児期に閉鎖すべきか

○本田 義博, 鈴木 章司, 加賀 重亜喜, 沼野 典史, 吉田 幸代, 神谷 健太郎, 榊原 賢士, 葛 仁猛 (山梨大学医学部 第二外科)

Keywords:心房中隔欠損, 肺高血圧, 長期予後

【背景】孤立性2次孔欠損型心房中隔欠損症 (以下 ASD) では比較的稀に乳児期より肺高血圧 (以下 PH) を合併する患者がみられるが、device closureの時代における乳児期 PH合併症例の治療方針には議論がある。われわれは乳児期 ASD/PHに対し早期に外科閉鎖を行ってきたので、その臨床像と予後につき検討する。【対象】1994年以降、エコー上 PHを認め乳児期に外科治療を行った ASD患者16例。日齢は82から339日 (中央値214日)、体重4.0kgから8.6kg (中央値6.2kg)。2例で左上大静脈遺残を合併、10例は21 trisomy合併であった。【結果】13例では術前検査として心臓カテーテル検査が行われた。右室圧/左室圧比率は0.33から0.93 (中央値0.76)、肺血管抵抗1.14から6.0 (同2.4)、肺/体血流比は1.26から3.15 (同1.73)であった。肺生検施行例はなかった。周術期死亡・遠隔死亡はなし。術後内服として9例で beraprost、3例で PDE阻害薬を併用、1例ではさらに bosentanを投与した。術後1か月から3か月のエコー検査で全例とも肺高血圧の改善を認め、術後経過観察期間1年以上の症例ではいずれも内服中止が可能であった。【考察】乳児期 ASD/PH患者では PH進行による肺血管閉塞性病変・心不全の懸念もある。われわれは早期の手術介入が予後を改善すると考え積極的に乳児期に外科治療を行ってきた。短期・長期成績とも良好であり、PHの軽快が得られた。また乳児期に PHを呈する症例では21 trisomy合併例が多かったが、予後に関して差はなかった。今後データベースの活用によるさらなる検討が望まれるが、症例数は少ないものの我々の治療戦略は妥当と考えられた。【結語】乳児期 ASD/PHに対する早期手術の成績は良好で、PHの改善が期待できる。PHを認めた場合には device closureを待つことなく早期に手術介入すべきである。